



手で見るぼくの世界は

檜崎茜／作 酒井以／装画・挿絵

日本文学 913 カ

くもん出版



目が見えない^{たすく}佑は、視覚支援学校の中学部に通い始めたが、新しい仲間になじめず、白杖^{はくじょう}の練習にも気が入らない。実は、小学部から一緒の^{ふたば}双葉が、ある事件のせいで不登校になってしまったのだ。もう大丈夫と言っていたのになぜだろう。

ハーベスト

花里真希／著 講談社

日本文学 913 ハ



人と話すのが苦手で本好きな^{ぼく}。教師に誘われて園芸部に入ったが、ほかの部員は、乱暴な話し方でこわそうな西森くんと、古いぬいぐるみを抱く帰国子女アズサだけ。園芸なんてやったことがないし、仲間がこれで大丈夫？

夜間中学へようこそ

山本悦子／作 岩崎書店

日本文学 913 ヤ



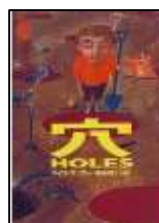
4月からおばあちゃんが夜間中学に通い始めた。そこは、昼間私が通っている中学とはちょっとちがうみたい。ある日、おばあちゃんが足をねんざしてしまい、付き添いで私も夜間中学に行くことになっちゃった！

穴

ルイス・サッカー／作 幸田敦子／訳

アメリカ文学 933 ヲ

講談社



少年スタンリー・イェルナッツは、ある日、やってもいけないことで有罪になり、砂漠にある少年院に行かされた。そこでは毎日、おかしいあだ名がついた仲間とともに、穴を掘られる。スタンリーは生き残れるのだろうか。

11 番目の取引

アリッサ・ホリングスワース／作

もりうちすみこ／訳 鈴木出版

アメリカ文学 933 ホ



少年サミは、祖父とともにアメリカに逃げてきたアフガニスタン難民だ。祖父は、伝統楽器ルバーブの有名奏者で、その演奏で生計を立てていたが、ある日、ルバーブが盗まれてしまう。サミは、決意し、動き出す…。目が離せなくなる物語。

オタバリの少年探偵たち

セシル・デイ＝ルイス／作 脇明子／訳

イギリス文学 B 933 ル

岩波書店



第二次世界大戦後のイギリス。オタバリの町に住むニック達は、遊んでいて、学校の窓ガラスを割ってしまった。自分たちで弁償しようと、それぞれが靴磨きなどを^{くつ}するが、ある日、みんなで稼いだお金が消えてしまう。さて犯人は？

牧野富太郎 — 日本植物学の父 —

清水洋美／文 里見和彦／絵

個人伝記 289 マ

汐文社



牧野富太郎は1862年、土佐(高知県)で酒蔵を営む名家で生まれました。子どものころから木々や草花が大好き。学校にはほとんど通わず、自力で植物の研究に没頭していると、特別に大学で研究することを許されるのですが…。日本を代表する植物学者の情熱的な生涯をたどる。

カメラにうつらなかった真実

— 3 人の写真家が見た日系人収容所 —

エリザベス・パートリッジ／文 ローレン・タマキ／絵

移民・難民問題 334 ハ

松波佐知子／訳 徳間書店



第二次世界大戦中のアメリカで、多くの日系アメリカ人が強制収容所に入れられた。そんな収容所での過酷な生活の様子を、立場の違う3人のカメラマンがそれぞれ写真に捉えた。いったいどんな暮らしだったのだろうか。

